

情報の理論体系の変遷と社会変化

スピーカー：端山 貢明氏

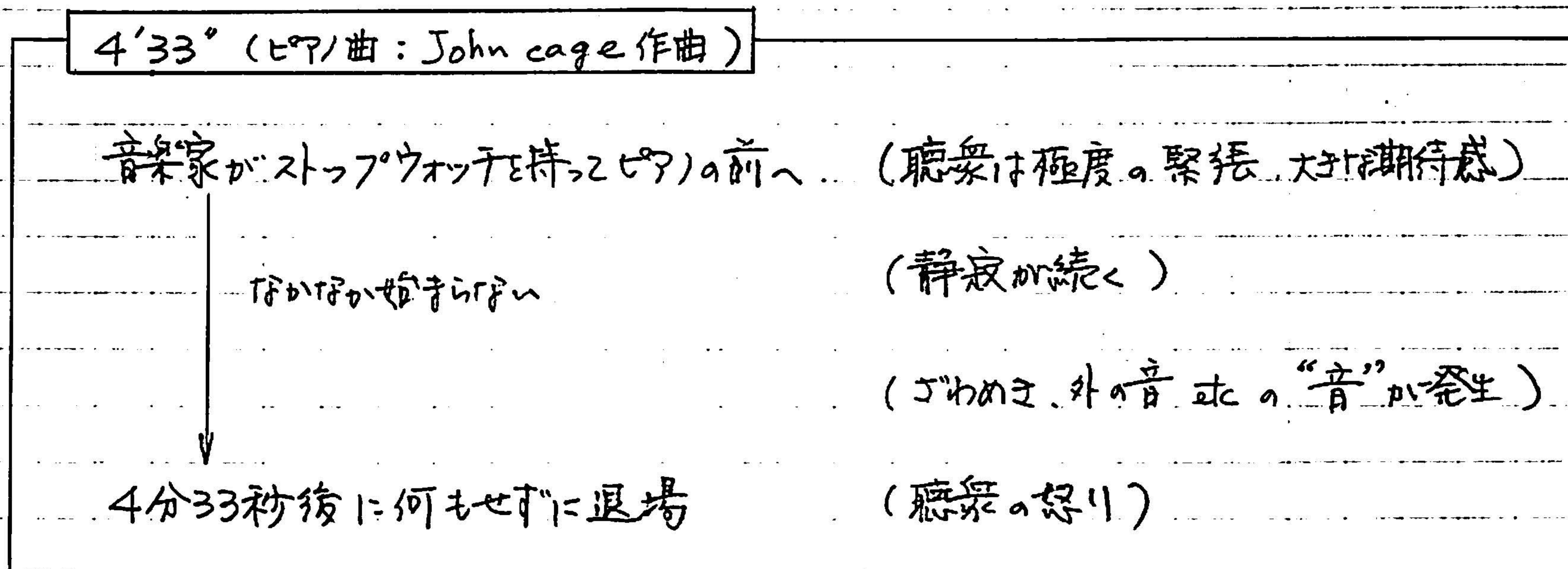
1. 情報の新理論体系

1-1. 4'33"の提案

1945年 第二次世界大戦後 情報流通の社会的意味が拡大する。(近代から現代へ)

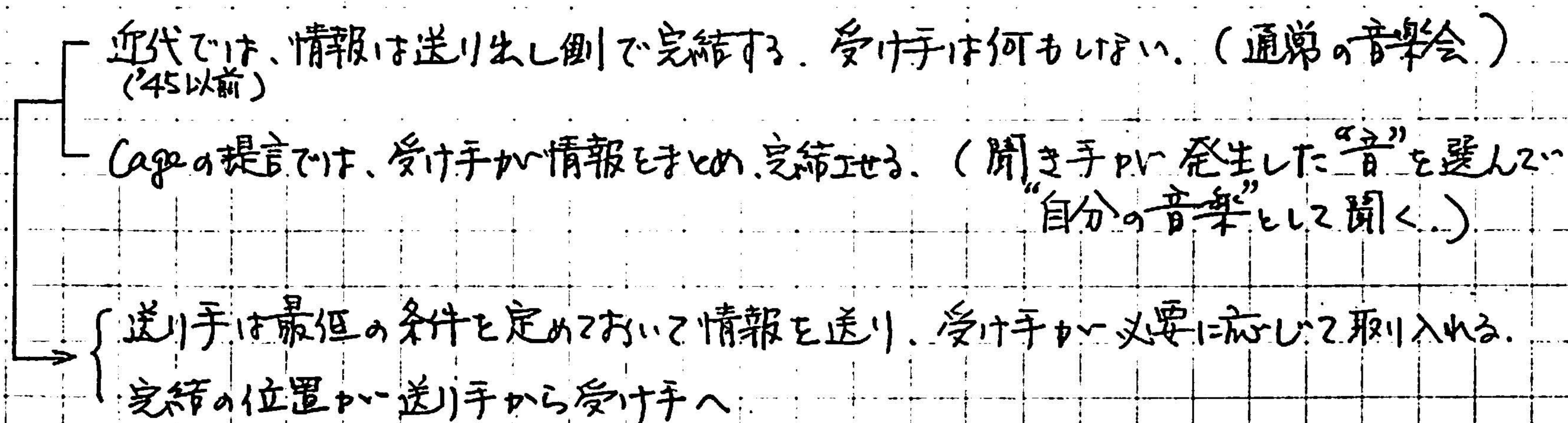
↓
1947年 近代の理論体系として サイバネティクス・情報理論等の具体的方法が示される。

↓
1951年 4'33"が新思想として提案される。



1-2 4'33"の持つ意味

Cageの提言は、「情報の受け渡しの中で、情報の完結する位置が変わってくる。」ということであった。
(情報の完結: ある目的にとって、情報として必要な効果を生ずるようになること)



情報の理論体系の変遷と社会変化

スピーカー：端山 貢明氏

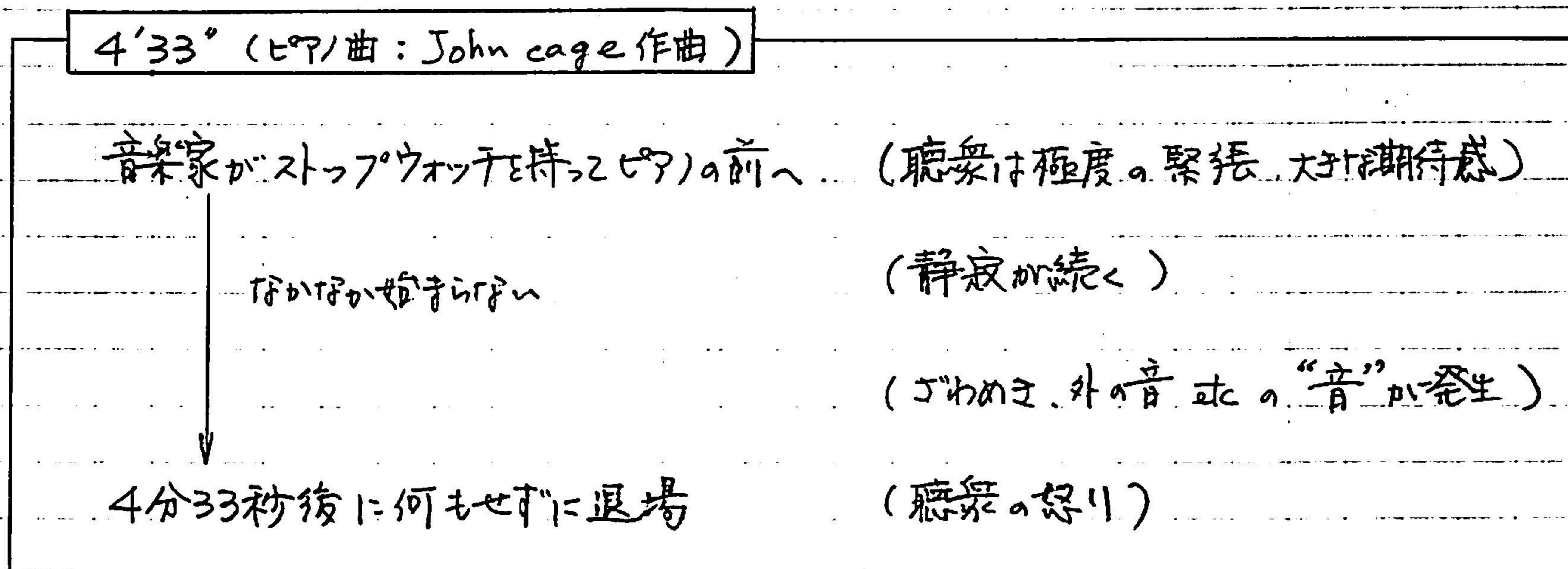
1. 情報の新理論体系

1-1. 4'33"の提案

1945年 第二次世界大戦後 情報流通の社会的意味が拡大する。(近代から現代へ)

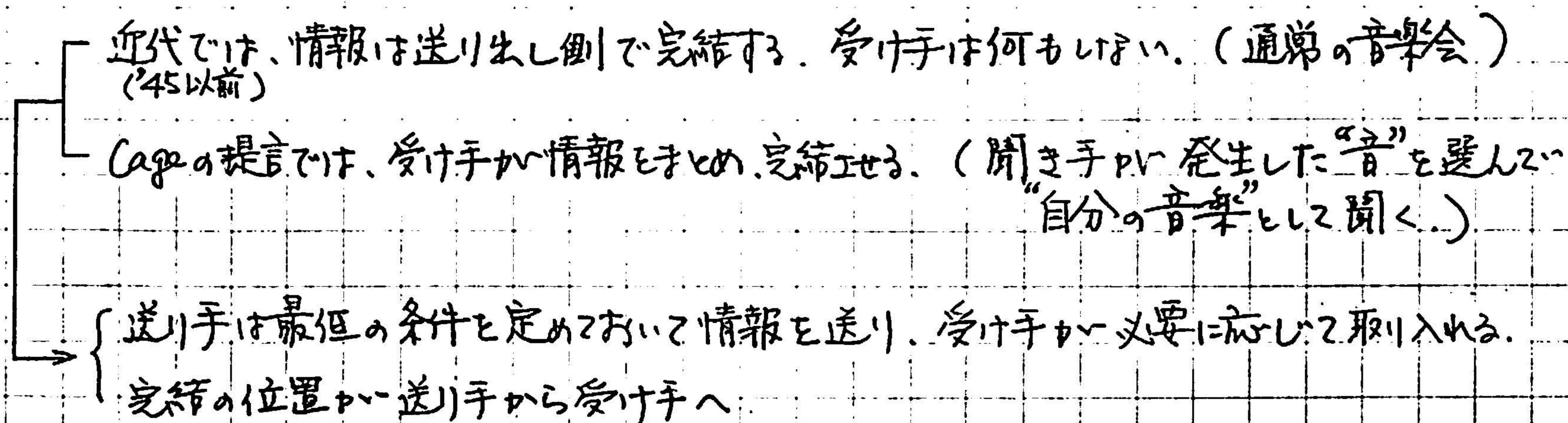
↓
1947年 近代の理論体系として サイバネティクス・情報理論等の具体的方法が示される。

↓
1951年 4'33"が新思想として提案される。



1-2 4'33"の持つ意味

Cageの提言は、「情報の受け渡しの中で、情報の完結する位置が変わってくる。」ということであった。
(情報の完結: ある目的にとって、情報として必要な効果を生ずるようになること)



1-3 Cageの理論の社会への影響

• Cageの理論は1945年以後の現代社会における必要性・方向性を示唆したものである。

• さらには芸術の方向へ進み、社会へ影響していった。

受け取り側が芸術へ参加
(アクセス側の参加性・主体性) ⇒

- 社会文明においても新しいものへ生まれるのではないかという示唆
- アクセス側の主体性をどれだけ顕現させるかが社会的技術における課題となった。

↓
芸術家が潜在していた社会の趨勢をより敏感に感じとり、顕在化させた。

• 1960~1970年代の社会的変化。

1960年代初め 前衛的なもの(参加性の強いもの)が社会に浸透し始めた。

↓
1960年代終わり 保守逆転がありそうにみえた。

↓
1960末~70年代 アクセス側の参加性の実現が顕著になってゆく。
テクノロジーがアクセス側の主体性を助けてくれる。(ex. キャッシュカード)

↓
1970年代半ば 「アクセス側の参加性」の急速な衰退
芸術自体でさえも実現できず、提言だけで終わってしまった。

↑
アクセスする主体の階層の変化。

2. 中間階級の出現と社会変化

2-1 情報の定着の移動と中間階級

• 社会において生産に関わることのできる人口がメディアへ大きな影響を与える。

• 近代から現代への情報の定着の移動は、この人口の変化及び質の変化による。

近代

- 文化・社会構造を最も効果的に動かし、その質を決定していたのは全人口の5%の中産階級。
(人々の階級構造がTree型)

- 中産階級
長い間、何世代にもわたり資産、文化、社会的感覚すべてを伝承している。

現代

- 50~60年代の社会の経済的拡大によって、中産階級以下の人々の情報のアクセス主体としての参入が急増
(Tree構造の崩壊)

- 中間階級
中産階級と同程度の収入があり、消費形態は一極であるが、資産、文化的バックボーンがない。

4'33'の提言

中間階級層のアクセス主体としての活動
をサポートするシステムの必要性

2-2 中間階級の影響力の拡大

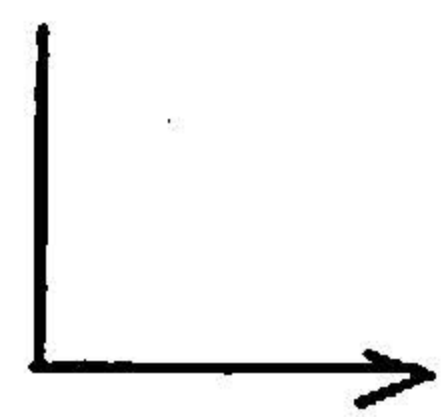
- 中間階級は文化・社会的感覚は伝承しておらず、伝統的なもの等、中産階級のシンボルの消費はするが、馴れぬずらに離れていった。(クラシックコンサートなど)

<70年代前半>

- 古いものが蚕食され、新しい中間階級の文化形態が構築された。(ホーリング・ブームなど)
中間階級の質の向上、行動・権利の拡大

<70年代後半>

- 中間階級の文化が成熟し、文化の先導者(特に芸術家)の社会的な力が弱くなっていった。芸術家が次世代の先行指標として得られなくなった。



- 情報の送り手が従来の支配意識から支持意識(アクセス側サポート)へ変化
- 受け手の主体性の確立

<70年代後半>

- 社会構造自体は変わってしまったのに対し、それを維持する体制、方法論、テクノロジーがそのレベルに達していなかった。

- 中間階級の二世の台頭

3. 時差のある社会構造

3-1 中間階級二世時代

中間階級一世 ---- 上位階級(中産階級)を意識してから文化を吸収

中間階級二世 ---- 何のためにもなく上位文化を部分的に蚕食し始めた。

(パンケリ族、セリーヌ・ルビソンの浸透)

→ 新しい社会の質が生まれようとしている。

- ・ 二世のアクセスのレオが根本的に一世と異なる。
- ・ 二世連の考え方が彼らの親(一世)に影響し、社会全体へ伝播している。

3-2 現在の社会構造

・ 現在の社会は、中間階級一世が内包していた近代の遺物がすべてなくなつた状態。

・ 今後の社会は時差をもった複合形態を有すると予想される。

- 日本だけでなく世界的拡がりを持つ。
- 世代の差
- 各層段階の差

従つて新しい社会システムが生き残るには、

・ 新しいアクセス主体(中間階級二世)の存立をサポートする機能。

・ 社会的時差を包括する機能

が必要とされる。

質疑応答

○ 外国において新しい情報の理論の発展状況はどうか。

アメリカの場合 ・新理論を提言し、さらにそれを実現する力を有している。
・そして新しい芸術を数多く創出したが、それらはアメリカ1国の問題ではなく世界的視野に立っている。

ヨーロッパの場合 ・提言はするが、社会的活動としては実現しない。
・特にイギリスでは近代文化を創り出したという自負が、現在では負担となっている。

これに対し日本の場合は 自発的に社会変化を発生させる以前に、外部(外国)からの刺激によって変化してきた。従ってその変化は本質的ではないと考えられる。

○ アクセス側が主体である場合、発信側にとってみれば、あらゆる種類の情報発信を試みなければならぬのか。

最終的に安定した状態(発信側がいない状態)になることが期待できる。

↓
アクセス側とそれをサポートする社会機構のみが存在する状態
(アクセス側が情報を生産する立場になる。)

勿論この安定状態に至るまでの移行段階では負担が重い。

→ 送り手はいろいろな情報を品揃えし、アクセス側に示す。(百科事典タイプ)

送り手にとって重要なことは、アクセス側が動かしてゆくようなシステムの構築を心掛けること。

○ 生産構造、生産現場において“アクセス側の主体性”をどう反映すればよいか。

生産の場においてはまだ“解答”が出ていない状態である。

- 中間階級二世の価値体系は短期間で確立されるのか。またそれは画一的か多様化したものか。

価値体系の確立は、アクセス可能人口によって決定されるが、それまでには様々なイベントが発生する。

初期に生まれる個別化・多様化した価値の集合が整備され、時差のある体系に生まれる。

↑
ニューテクノロジーと呼ばれるもののいかにはこの“整備”をサポートするかが問題である。

- 企業社会における動きに関しても同様のことが言えるか。

二世が企業内で台頭する以前、数年以内に変化し始める。

現在多くの企業は近代の構造をもつ。

若者にアクセス側としての認識があれば、この構造は崩壊せざるを得ない。

“近代”的世代との時差は、それを埋めるシステムの構築によって許容される。

- 企業のマーケティングはどのように変化するか。

多様化した市場すべてに対し、それぞれ別個のマーケティングを行うのではなく、市場開拓、市場コントロールといった活動が行われる。

アクセス側による企業活動も現われ始めている。

- ・消費者によるコンピューターソフトウェアの開発
- ・消費者が販売に携わる新商法
- ・学生による企業活動

個別化・多様化した消費活動に対応する為に、企業の社会コミュニケーション活動が重要。その中心となるのがCIである。

→ 売る為のイメージ作りではない。
社会における企業の立場を決めること。

(何を社会に渡すのか
何を社会から受け取るのか)

大企業が個別化、多様化した需要に応えるには、企業内ベンチャー等、小規模集団活動が必要。特に新分野、先端分野に有効。

○ 新しいアクセス主体に対応すべき建設業の姿は、

建築、都市の中で高い表現性(ニセ文化)に応える方法を考えなければならぬ。

人間のI/O機能を向上させるものが都市である。

人間と都市の関係性の中での建築の位置付け → 建築物の都市化が考えられる。

以上

分散の背景

▷ 4'33" — プロセス側の主体性

主体の役割の正誤。

effector の入れ替り。

▷ 中間階級 — 成熟と = 世

社会の入り口の形態
他は

にふくまれる。この
入れ替り。

▷ 時差のある構造全体に対応するシステム

Sustainability

命令の背景

φ'33"

プロセス間の主体性

主体の動きについて

φ'内の階級

この = 世

成熟

未完全な
行動によって
引き起こされる。
effectorの活動

時差のある構造全体にわたって

